インクルーシブ教育の展望とその方略の提言

研究代表者　石田　祥代
共同研究者（①氏名、②フリガナ、③ローマ字表記、④所属部局名、⑤職名、⑥専門分野）
①眞城　知己、②サナギ　トモミ、③Sanagi Tomomi、④関西学院大学教育学部、⑤教授、⑥障害児教育、特別な教育的ニーズ論
①是永　かな子、②コレナガ　カナコ、③ Korenaga Kanako、④高知大学教育研究部、⑤教授、⑥特別支援教育、インクルーシブ教育

石田　祥代　Ishida Sachiyo

教育学部教授
専門分野：障害児教育、インクルーシブ教育
筑波大学大学院で博士号（心身障害学）を取得。
筑波大学心身障害学系助手、東京成徳大学応用心理学部准教授・教授を経て、2017年より現職。

—— どのような研究内容か？

現在進行中の教育制度ありきではなく、つねに現在の学校制度を問い直しながら、子どもの教育的ニーズの多様性を教育の中に包み込むにはどうしたらよいのかを研究しています。現在の学校制度を問い直すための知見として、北欧諸国を研究の対象国とし、各国の学校や教育委員会、教育センター（写真１）を訪問し支援が必要な子どもたちのためにどのような制度をつくりあげてきたのかについてフィールド調査を行っています。各国の教育関係者と話し合いを重ねる中で、問題解決に向けた具体策が見出されることもあります。その一方で、日本の教育成果、たとえば千葉大学教育学部附属特別支援学校小学部（写真２）や高等部（写真３）の「教科と領域を合わせた指導」の取り組みを報告することで北欧の先生に新たな視点をもってもらえることもあります。

写真１

—— 何の役に立つ研究なのか？

北欧へ調査に行き、学校の先生や教育委員会、教育センターの方々と話していると、北欧の学校でも、日本と同じような問題を抱えていることが少なからずあります。デンマークでの調査では国内の自治体をいくつも訪問するうちに、最終的な目標は同じですが、自治体ごとに工夫をこらした計画を練っていることが明らかになってきました。「答え（方略）は一つでない→いろいろな方略を考えることができる」、ということが、この研究の面白さです。

—— 今後の計画は？

これまでは就学前や義務教育段階の子どもたちに焦点を当て研究を進めてきました。今年度からは、義務教育を終えた子どもたちのうち、特別な支援や教育的配慮が必要な子どもたちがどこへ進学し、進学先でどのような教育的課題を抱えているのか、その課題に対して学校や教育委員会がどう対応しているのかについて、北欧でさらに調査を進めます。日本は高校への進学率が98%を超える教育大国です。北欧も高校への進学率が非常に高いので、その取り組みを丁寧に分析し

検証することで、今後いっそうのインクルーシブ教育が求められる日本の後期中等教育に対し、その方策を具体的に提言したいと考えています。

―― 関連ウェブサイトへのリンクURL

▶千葉大学教育学部附属特別支援学校HP

―― 成果を客観的に示す論文や新聞等での掲載の紹介

石田祥代・是永かな子（2017）心理的・福祉的諸問題に注目した義務教育諸学校における児童生徒支援に関する研究．北ヨーロッパ研究．13，1－11．
▶https://doi.org/10.24579/janes.13.0_9
石田祥代（2017）インクルーシブ教育の展望．発達障害システム学研究．16(1)，53－59．
石田祥代（2019）特別支援教育とは．『特別支援教育』．北樹出版．10－18．（写真４）
石田祥代・是永かな子（2019）デンマークにおける地方自治構造改革後のインクルーシヴ教育の取り組みに関する報告．北ヨーロッパ研究．15，47－56．
是永かな子・石田祥代（2019）スウェーデン・トッメリラコミューンにおける中央子ども健康チームの取り組み．15，57－66．

―― この研究の「強み」は？

どの人も通ったことのある学校という身近な教育機関について検討をしているので、多くの方々に関心をもってもらえることが強みだと感じています。その一方で、自分自身のこれまでの経験や価値観で捉える方も多いので、新しい発想を取り入れることが難しい面もあり弱点となっています。

写真２

写真３

写真４

―― 学生や若手研究者へのメッセージ

グローバルな時代が到来し、世界各国の情報を以前よりも手軽に入手できるようになりました。たくさんの情報を分析することは不可欠ですが、じっくりと研究テーマに向き合い、掘り下げ、思考を深めていくことも大切です。「なぜ」というスタート地点を忘れないように、研究を進めていって欲しいと思います。